

令和元・2年度 東京都教育委員会
持続可能な社会づくりに向けた教育推進校

研究主題

地球学・SDGs課題研究
「SDGs達成に向けた生徒の研究発表を通して学びあう」
—— 地球と私を考えるために ——



東京都立武蔵高等学校

1 研究の概要

発展途上国が先進国に並ぶ経済発展を迎える今、人類を生み育んできた地球について、科学の枠を越えて様々な視点で学び、私たちが直面している問題を地球全体の問題として考えることは、国際舞台で活躍するリーダーにとって大切である。

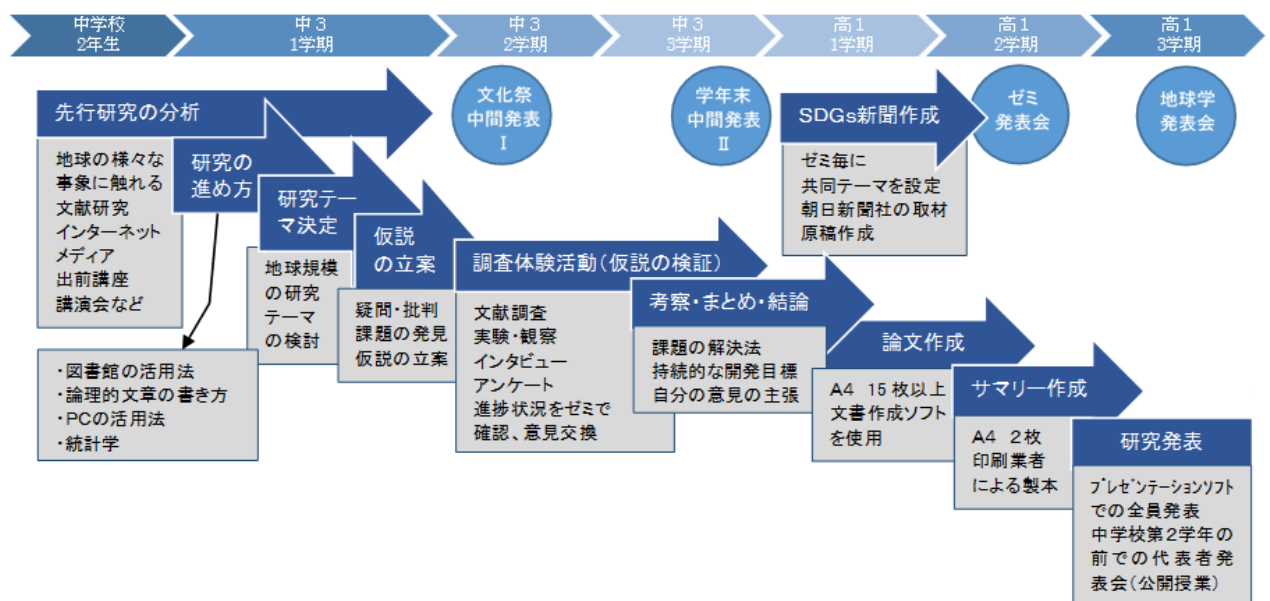
さらに、国際社会を持続的に支えていくためには、教科等横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、社会において自らの役割を果たし、自分の将来を確立するための実現可能な方法を見付けられるような力を育成することや、そのための知識を得たり、手順を調べたりするにはどのような機関等を利用するのかを理解させ、膨大な情報の活用や調査・研究に必要な資質、能力及び態度を養うことが重要である。

本研究では総合的な探究の時間を活用した、個人課題研究の進め方と新聞作成による研究のまとめ、研究発表の仕方等、本校の取組について紹介する。

2 研究の流れ

(1) 中学校3年生～高校1年生 2年間の研究スケジュール

地球学SDGs個人課題研究のスケジュール



(2) SDGs × 地球学

SDGs (エス・ディー・ジーズ) とは、持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals) のことで、2015年9月に、国連サミットにおいて全ての国連加盟国が全会一致で採択された、先進国と発展途上国が協力して持続可能な未来を目指すための17個の目標のことである。世界レベルのこの目標の理念は、本校の地球学の理念とも通じるもので、本校では地球学とSDGsを関連させて学びを深めている。



3 実践の紹介

新聞社より講師を招き、10月7日(水)5時限目に高等学校1年生対象のワークショップを行った(写真)。新聞を活用して、楽しくSDGsを考える授業内容である。

本校の高等学校第1学年では、地球学×SDGs×新聞のコラボレーションにより、地球規模の課題を自分事化する意識を高める授業を行っている。

今回の授業は、新聞社特製のSDGs付箋を活用して、思考が見える化するというものである。

まず授業当日の朝刊を生徒全員に配付し、SDGsの達成に向けて自分が重要だと考える記事を選ばせる。それぞれの記事が、17のゴールのうちどれと関連が深いかを考え、関連するゴールと記事を付箋で結ぶ。次に該当する番号の付箋の余白に記事の感想や自分の考えを記入する。ゴールと関連する記事の文言にアンダーラインを引き、記事の内容が経済・環境・社会の側面にどのようなインパクトを与えるかを分析する。最後に周りの仲間と自分の考えを共有し、課題解決の手がかりを得ることにつなげていく。

SDGsが目指す2030年の世界をイメージしながら新聞を読むことで、人類や地球が直面している状況を、実感する学びが展開する。

この授業を動機付けとして、以降の授業では班ごとに研究テーマを決定し、課題研究がスタートする。研究活動は、文献調査、問いと仮説の立案、調査体験活動、SDGs新聞の作成、研究発表、研究ポスターの作成からなり、調査体験活動はテーマによって手法が異なるが、文献調査、実験観察、インタビュー、アンケート等により進めていく。

SDGs新聞は、各班の研究要旨を新聞記事に執筆し、新聞社で編集、印刷したものである。自分たちの研究内容が実際の新聞記事になることで、研究活動のモチベーションがあがる。

最後に研究のまとめとして、研究発表とポスターの作成を行う。研究発表は各班4分間の持ち時間で、ICTのプレゼンテーションソフトを使って研究の概要、持続的な開発目標を説明する。発表した内容は、ポスター用紙に自由にレイアウトして記録する。生徒の作品は、校内の廊下に掲示し(写真)全校生徒が共有する。



4 成果と課題

令和元年 11 月及び令和 2 年 9 月に持続可能な社会づくりに向けた教育を推進するために、学習についてのアンケートを実施した。「自分たちの行動は、地球の課題を解決することにつながっていると思う。」という問いに対して、令和元年 11 月の調査では「そう思う・どちらかというと思う」と答えた生徒が 62%で、推進校全体（74%）よりかなり低かったが、令和 2 年 9 月調査では 72%と 10 ポイント増加した。しかし、一方で「課題解決には、必ずトレードオフが存在するため、解決策を二者択一で選ぶことは難しいと思う。」という問いに対しては、「そう思う・どちらかというと思う」と答えた生徒が 97%もいることから、授業で様々な事例や背景を知れば知るほど、自分の考えや行動が本当によいことなのかの判断を迷わせていると思われる。

【成果】

- ① SDG s を用いた N I E を推進する新聞社から講師を招き、当日の新聞を活用することで、世の中で起きている様々な事象に対して課題を見いださせることができた。また持続的な社会をつくる必要性に気付かせたことで、楽しく SDG s を考える授業を実施することができた。授業内容では、新聞社特製の SDG s 付箋で思考を見える化し、新聞×SDG s で世界的課題を自分事化する視点がもてるようにした。SDG s の達成に向けて重要だと考えることを共有したことで、課題解決の手がかりを得ることにつながることができた。また、SDG s が目指す 2030 年の世界をイメージしながら新聞を読むことで、人類や地球が直面している課題を肌で感じ、研究テーマの設定、仮説の立案、検証への動機付けとすることができた。
- ② 各班の研究の要旨を「SDG s 新聞」に記事として掲載し、発表することができた。自分たちが協力して研究をした成果が、実際の新聞記事の活字になることで、高い学習意欲を継続することができた。また、新聞記事を媒体として、家族や校外の人とも話題を共有し、地球の課題について共に考える機会をもつことができた。
- ③ 今後は、各班の研究内容をポスターにデザインし、校内に掲示する活動を行う。共同研究のまとめを独自性のある形にすることで、班の意見・主張を、持続的な開発目標の中に反映することができると考える。
- ④ 研究発表会では班ごとに研究の成果をまとめ、プレゼンテーションソフトを用いた研究発表を行った。地球規模の課題を自分事とし、持続的な開発目標を強く主張することで、思考力・判断力・表現力を養うことができた。

【課題】

本校の中学校段階からの入学生（以降、中入生）は、附属中学校で総合的な学習の時間に「地球学」を学んでおり、個人課題研究論文の作成、研究発表を行っている。高等学校段階からの入学生（以降、高入生）も、出身の中学校で独自に学んできたことがあり、経験値や価値観がそれぞれ異なる。様々な世界観をもつ中入生と高入生を同じ班で活動させることで、よい学び合いを展開することができた。しかし、中入生と高入生では、本校における課題研究の経験値が異なることから、生徒が考えを深める能力に差があった。

また、課題研究を進めていく上で、同じ班に複数クラスの生徒が混在しているため、生徒同士の情報交換がやりにくく、休み時間や放課後の意思疎通が難しかった。

そのため、オンラインでのブレインストーミングの機会をつくり、話し合いをもとに研究を^{かんよう}涵養するための時間をしっかりと確保させることが今後は必要である。